

図書 紹介
医薬品クライシス
78兆円市場の激震

著者：佐藤健太郎（サイエンスライター）

発行：(株)新潮社／〒162-8711 東京都新宿区矢来 71／TEL03-3266-5430（編集）／
新書判／207頁／価格 700円（税別）／2010年1月20日発行

医薬品業界は、一般に高収益で、不況に強く安定した業界として知られている（30数年在職したが、そんなことはないと思ったが・・・）。サブタイトル「78兆円市場の激震」とあるように、世界で78兆円、国内7兆円の医薬品業界が2010年前後に世界の製薬会社の収益を支える大型製品の特許が次々と切れ、医薬品業界は重大なピンチを迎えている（これが「2010年問題」である）。新薬が出なくなった背景には、副作用の問題もそのひとつがある。また、一方「ゼロリスク志向」もある。医薬品に限らず、どんなメリットがあろうと一点のリスクでもあれば排除すべしという潔癖症的傾向が、あらゆる場面でコスト増加をもたらし、我々自身の首を絞めていることも一因である。

筆者は、最近まで製薬会社の研究者として新薬開発の最前線で働き、科学技術の進歩のわりには新薬がさっぱり生まれなくなったという。その現象がなぜ起きたのかを明らかにし、また、医薬のような特殊な商品に付きまとうさまざまな誤解などについてもわかりやすく解説するのが動機であり、目的であると述べている。

- 1章 薬の効果は奇跡に近い
- 2章 創薬というギャンブル
- 3章 全ての医薬は欠陥品である
- 4章 常識の通用しない78兆円市場
- 5章 迫り来る2010年問題
- 6章 製薬会社の終わらない使命

次にサブタイトルから凡そ内容が理解できるので、以下紹介する。1章は、薬は体のどこに作用して効果を表すかについてで、「薬九層倍」は真実か、創薬は人類最難の事業である、薬はタンパク質に働きかける、胃潰瘍と花粉症が同じ薬で治る、インスリンを飲み薬にでき

ない理由など、2章は、医薬がいかに創り出されるについてで、最先端の創薬現場、新薬を創れる国は10ヶ国に満たない、動物実験でわからないこと、特許をめぐる熾烈な争い、「研究」と「開発」の違い、臨床試験の長い道のり、のしかかる倫理問題などである。

3章は、医薬品の作用・副作用についてで、薬は病気を治すものではない、誰にでも効く薬はない、防げる副作用・防げない副作用、薬と毒は紙一重、リスク過敏症の弊害、タミフル騒動の盲点、新型インフルエンザの特効薬など、4章は、医薬品業界の特殊性についてで、アメリカの薬価は世界一、特許切れという恐怖、ジェネリックと先発品は同じか、普及するジェネリック、高収入で不安定な業界構造、なにが売れるかわからないなどである。

5章では、2010年問題についてで、巨艦ファイザーの憂鬱、創薬技術の躍進、ゲノム解読とテーラーメイド医療、研究者大量失業の時代、創薬力は低下したか、難病だけが残った、厳格化する安全基準、大合併が招いて保守化、ベンチャー企業の台頭、発想の芽を摘んだ成果主義など、6章では、医薬品業界の今後についてで、研究機関に新薬は創れない、優良なベンチャーの争奪戦、抗体医薬の登場、鋭い効き目と高い安全性、命の値段がつりあがる、夢の医療の向かってなどである。

巻末に「ガンなんか治しちゃってほんとうにいいんだろうか」の研究者のつぶやきが載っている。抗生物質や各種生活習慣治療薬の進歩により、ここ数10年で先進国の平均寿命は飛躍的に延びた。最も恐れられているガンさえも克服したら、人類は何歳まで生きることができるのだろうか。それは現在を遥かに超える超高齢化社会がやってくる。すると年金制度は破たんするだろうし、認知症の患者は激増して介護などに要する費用は膨れ上がるだろう。新書にしては内容の濃い一冊となっている。ほかに、昨年10月刊行された「新薬ひとつに1000億円!」アメリカ医薬品研究開発の裏側（朝日選書）もある（学会事務局）。